



高輪だより

平成28年6月号

港区立高輪幼稚園
園長 新山 裕之

<3歳児の園庭デビューのもつ意味>

家庭では一人っ子できょうだいがいない子も、幼稚園にはすてきな兄や姉、かわいい弟や妹がいます。3歳児が初めて園庭に出る日は、毎年とても微笑ましいかわりが見られます。事前に担任同士がペアをを考えておき、5歳児が靴の履き替えなどを手伝い、手をつないで園庭のあちこちを案内しました。ベンチに座ると、膝の上に抱っこしてこいのぼりを見上げ、優しく話し掛ける姿もありました。子どもはもちろん、そばにいた大人もみんなが自然と笑顔になったひとときでした。

<受け継いでいくのは「心」>

今年は園内研で異学年のかかわり方の工夫やそこでの育ちを検証していきます。そこで一番大事にしたいのは、その中で育つ「心」です。幼稚園には、先生という楽しくて頼れる大人がいてくれる。学級には、同じ絵本を見て一緒に笑う子がいる（それが次第に、友達という存在になっていくのですが…）。そして、優しくしてくれるお兄さん、お姉さんがいることを体感していきます。生まれて初めて社会生活を営む幼稚園において、子どもたちが「人」に対してどのような感情を抱くのかは、その子の一生にかかわる極めて重要なことなのです。

<人に対する信頼感という心の根っこ>

園庭を案内してもらった3歳児は、ちょっとドキドキしながら、「人は、自分にとって好ましい存在であり、困ったときに助けてくれる存在」であるという、人に対する基本的な信頼感を感じています。これこそが、「幼児期は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期である」ということの核心です。一方、5歳児は、頼ってくれるうれしさはもちろん、思いどおりに動いてくれない歯がゆさも体験します。それでも、優しい対応ができるのは、自分自身も同じようにしてもらった体験があるからです。こんなすてきな「心」が受け継がれているところが、高輪幼稚園の自慢です。



園庭散歩の後、5歳児の膝に座る3歳児



高輪ガーデンで採れたいちごでジャム作り



今年は親子で夏みかんを収穫(高輪タイムで)



散歩に出掛けた高輪台小学校の第2校庭



たくさんの動物を見てきた上野動物園遠足

高輪の 二十四節気

・・・水無月(みなづき)・・・

芒種(5日)・・・紫陽花が色付き始めます・・・

夏至(21日)・・・水遊びが気持ちいい季節です・・・

今年は鉄棒の後ろの「ユスラウメ(桃梅、山桜桃梅)」が、甘酸っぱい初夏の味を楽しませてくれました。屋上・高輪ガーデンに上がる階段脇の「ピワ」も色付き始めています。これらの実のなる木々は、歴代の先生方が、子どもたちが関わる自然環境を豊かにしようと、意図して植えたり残したりしてくれたものです。そのお陰で、都心でありながら、今こうして豊かな恵みを楽しんでいることを心から感謝します。